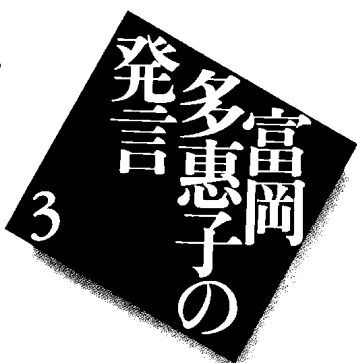


哲 富岡
多恵子の
発言
Taeko

3

岩波書店

女の表現



岩波書店

女の表現

富岡多恵子の発言 3

定価 2400 円(本体 2330 円)

1995 年 3 月 10 日 第 1 刷発行

著 者 とみおか た え こ
富岡多恵子

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000

印刷・三秀舎 カバー・半七印刷 製本・松岳社

© Taeko Tomioka 1995

ISBN4-00-003913-X

Printed in Japan

図<日本複写権センター委託出版物>本書の無断複写は、著作権
法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写は、
日本複写権センター(03-3401-2382)の許諾を得て下さい。

女の表現
目次

「文学的」おいたち記 その三

1

I

女の競合

9

からだの戦略

25

「主婦」解体

40

ハダカの女と女の裸——E・J・ベロックの写真

56

こわい写真——レニ・リーフェンシュタールのヌバ族

62

II

詩人の誕生——左川ちか

71

椰揄の視線——「女が見る女」と「男が見る女」

92

ひとの死に方

98

ボーと生きること

107

女に天才はいない

114

詩人のはにかみ

123

最後に嫌われた理由

128

III

女の表現

135

書くことと行動すること

150

拡散の時代

160

反イメージ

171

知られたくないお里とは何か

179

キツチュの力

190

死語となる言葉

204

だれと暮すか——対談・多田道太郎

209

【インタビュー】聞き手 黒川 創
「病氣」のこと

出典一覧 240

227

装幀
|| 菊地信義

「文学的」おいたち記 その三

わたしは三十代の半ばになって、小説らしきものを書き出した。この「歌のわかれ」には、私的な生活事情の変化も大きく加わっているが、オモテ向きの事情説明は、何度もひとにたずねられるたびに、あることないことくり返してきた。こういうムツカシイ問題は、本人が何度説明しても結局なんにもならないというのが、わたしの本音である。逆にいえば、本人にもよくわからぬことが、他人によくわかるように説明できるわけがないと思っているのである。

一九七三年に、それまで書いた詩篇をすべて集めた本を思潮社が出してくれた。その「後記」にこんなことを書いている――。「詩を書くことを、わたしはカタギの人間のやることだと一度も思ったことはない。しかしそのハグレ者は、出家僧か求道者か、或は門付けの乞食でもあり得るし、またはポンゴザの上で壺を振つてもいい。ところが語り出すことは、そういう求道や芸だけではおさまらぬ。それは、言語の記号も意味もつぶれたところからはじめねばならぬ。白首を格子の前にさらし、芸の下へ落ちていかねば仕様がなない。」

白首を格子の前にさらし、とはチトおおげさであるが、本人は、当節流に言えばマジに、格子女郎よ

りさらに下に落ちていくつもりなのだから、オメデタイ。しかし、売るほどの芸もない人間にできることは、自分を見世物にするしかないとの本能が必要だが、そのころ自覚されていたようだ。とはいっても、こういう「ものいい」は誤解されやすいが、わたしはそのころ、誤解されるのをおそれなくなっていた。ゴカイで足りなきや、六階にでも七階にでも、どうぞおあがり下さい、と。

小説には、詩の時の小野十三郎のような先生はいなかった。また、同人誌を嫌っていたから、相互批評が可能な友人も、小説を書く友人もない。それに当時は、文芸雑誌さえ読んでいないのだから、時代のひとが書いているものにも無頓着、無知である。まったく傲慢な「文学的」無産者であった。

もちろん、そのゴーマン・プロレタリアートにもちゃんとその「お返し」がくる。四十歳をこえるころから「苦闘」を強いられるのは当然といえば当然であつただろう。わたしはやつと自分が馬であることがわかり、目の前においしいニンジンの間隔おいていくつかぶらさげてやるくらいの親切がなくてはならぬと思うようになった。ニンジンには時にみじかい外国旅行であつたり、ささやかな悪事であつたりしたが、調教もいいかげんなままで無理矢理に走らされている馬は、目先にニンジンがちらちらするくらいで覚悟はつかないのである。

その昔、チチにつれてゆかれた競馬を思い出していた。向う正面の直線を走る馬に向つて無邪気に声援を送る娘に、チチは、コーナーが大事だというのだつた。たしかにコーナーは見ていてもこわい。何頭もの馬が遠心力にさからっていつせいに弧に突きこむ時、一瞬でも触れればおしまいだ。馬としてのわたしは他の何頭もの馬と競争しているの思ひからこわいのではない。ハグレ馬ながらも、やつと直

線からコーナーにかかる時がきていたのを、四十代になって自覚せざるをえなかったのである。それに付けても、昔のひともいう通り、チチハハの教えとはまことにありがたいものである。

「チチハハの教え」で思い出すのは、次のような歌の一節である。

「勝ち抜く僕等少国民／天皇陛下の御為に／死ねと教えた父母の――」

小学校入学の年から名称が国民学校となり、生徒は「少国民」となったので、右のような歌がつくれ、歌われたのであるが、そしてまたこんな歌のメロディーの一部をかすかに記憶しているのも不思議であるが、それはわたしのチチハハが一度も「天皇陛下の御為に 死ねと教えた」ことがなかったからである。チチは、当時、半ば強制されていた「国民服」着用を嫌って背広を着ていたという。それは多分、「思想」的な抵抗というより、彼が「おしやれ」な男だったからだと思われる。彼は自分の好む衣食の水準を保持するのには労をおしまなかった。敗戦前後の、もつとも食糧に不足したころ、彼の創意工夫が子供を救った。ハハは料理において伝統主義であるにすぎないが、チチは時にアヴァン・ギャルドであり、それは乱世に有効だった。

ともあれ、文字通り馬齢を重ねて四十代となった馬であるわたしは、覚悟もきまらぬままに「小説」の看板を出したむくいを次々に受ける。新聞小説をひき受けて、終ったと思つたらビョーキが爆発したのもそのひとつであった。自分自身が「新聞小説」の愛読者であつたのならともかく、そのころのわたしは「新聞小説」なんていったい今だれが読むのだろうと思つていた。だから、今の時代に「新聞小説」とはいいたいなんだろうという好奇心がうずき、それに負けてしまったのである。さすがに、二度

とそういう無謀なことはしなかった。

今では時間厳守病も努力の結果かなり治ってきてはいるが、時間厳守、シメキリ厳守、納期厳守のごとき、バカバカしい厳守病がわたしにあり、「新聞小説」という発表のシステムはそれを悪化させる。税金の納期を忘れて一日おくれても、泣きたいほど気がめいるのだが、税務署からホメられたことはない。ボーイフレンドと待ち合わせて、相手が五分おくれてやってきても、わたしはすでに帰ってしまったているのだから、この厳守病にはほとほと困りはててはいたのだったが、「新聞小説」の半年にわたる時間的拘束感の前には、「文学的」好奇心など軽くふっとんでしまったのだ。こういう不毛な努力と敗北も、なにごとくも味わってみなければわからぬのが凡人とすれば、そしてまた、なんだかんだとやっているうちに一生がすぎていくのであろうから、無駄だったとは思わない。ビョーキを治すのに、病院へいくかわりに、「新聞小説」で得た原稿料のほとんどをもつてハワイへいった。ビョーキの元凶が稼いだ金をつぎこめば、そのビョーキは退散するという、その単純な輪廻——、いや勘定の仕方は、あとで考えるとじつにチチのやり方に似ていておかしかった。

ハハがあの手へいったのも、わたしが四十代になってからだだった。ふた親が、ともにいなくなつてやつと、今度は自分の番だと思えるようになった。なにの番かといえば、死ぬ順番のことである。年の順という平穩を信じてのことではあるが、オヤの世代が消えて自分が死ぬ世代になったとの自覚である。一方で、ふた親がともにいなくなったことで、「解放」も感じた。小説、ことに短篇小説でチチやハハのことを材料にして書いているのは、あとになってみれば「供養」の気持もまじっている。「解放」を

得たあと、いくつかの、やや長い小説をわたしに書かせたのは、女性への信頼である。

三十代前半から、海のかなたアメリカのウーマン・リブの声の響きを耳にしていたとはいえ、その声に多少の違和感もあった。それは、ものごころつくころに出会った敗戦とアメリカによる占領がアメリカ文化の一方的な流れこみでもあったので、いつもどこかに、外からくる強い流れこみにはひと時立ち止って考えてみる癖がついているからであった。もちろん、国によっては、「おうちの事情」は異なるから、女性の声のあげ方もちがつてくる。そのころ、この国でも女性の「自前」の声が聞こえてきていた。ひとのなかへ入っていく能力に欠けるわたしは、たんなる遠くからの傍聴者、傍観者にすぎなかったが、それでも学ぶところが多かった。

なにかを変えていくには、そこに試行錯誤がともなうのは当然で、それを揶揄するのは簡単である。しかし、女性の声が思想として世界的にうねりとなってきたのは、それが究極の目的を女性だけの平穏や安泰においているのではないからであろう。

詩を書きだした学生のころから、すでに四十年くらい過ぎているが、その間に、「女」もその状況もやはり変化している。いつもわたしは、「女」や「女の文化」の説明を要求される場におかれると、それをしなければならぬことがうとましかった。社会的な階級差別には異議をとなえ、平等を求めるひとが、性別による階級をつくることに加担し、しかもそれに無頓着であるのに出くわすと、わたしは絶望にうちひしがれてなす術がなく、そういうひとたちへの違和感をなかなか解消できなかった。

もちろん一方で、「女の文化」にとじこめられてきた女性たちが、結果として、あとからくる女たち

を知らず知らずのうちに、しめ殺すようなことがあるのも体験的に知らされてきた。月に吠える男は詩人であっても、女が同じことをすれば狂気だときめつけられた。前口上や、説明や、弁明や弁解なしにものをいいうるジェンダーからの解放までには、かなりの時間がかかるということであった。

オシャレな女性にとっては、おそらく「女の文化」とか「女性解放」とかのごときコトバも内容も野暮なことにはちがいない。また、「実力主義」の女性にとつても、同様にそれらは野暮なことにはちがいない。「女性解放」にはドレイ解放と同種の、抑圧された被害者のイメージがどこかにまつわりつくから、自分たちはそんな被害者ではないとの不快感がよぎるのである。とくに、自分たちは解放されており、実力があれば男も女もないとの実感がそのひとたちはある。文句があるならやりなさいよ、というタンカも響く。わたし自身、二十代は、そういう無頓着のなかにいた。ただし、そこには歴史的な時間の認識が欠落している。四十代になって、そういう欠落を自分の国の女のひとたちが「自前」の声で糺していくのに出会った。それはヤボとかイキとか、そういうことではなかった。

「野暮」といえば、都会生れの人間の悪癖であるうか、わたしも野暮つたいことにハニカミが強く、ハスに構えるのが、チチハハの教育と環境のせいで身についている。チチハハともに、冗談軽口の類で野暮を打ちのめしていくのが常だったから、わたしはチチハハの戦争を感傷の壺の底に落ちず、喜劇として何度も楽しめるのであるが、小説を書くうちに、「小説」というのは野暮なものとの思いが深まっていた。野暮に徹していかないと、なにかが現われ出てこない。こんなことに気づくのにはさえ二十年かかっているのだから鈍なことである。

女の競合

1983

戦争をした、或いは戦争を起すかもしれないのは男であつて、女は戦争などしない、女は平和を好む、だから、女こそが平和を守れる、というような、漠然とした意識が女にはあるように思われる。漠然とした意識でなく、はっきりと女は平和主義者だという考えを表明し、その考えによつて女こそが平和を守りうるのだと結束するひとたちもいる。

戦いは男のもので、女は戦いや争いを好まないという思いこみは、初期の人類から食糧を狩りによつて得たことに、おそらく起因しているのだろう。狩りによつて得る生きたエサに代つて、地位、富、権力等のようなシンボル化したものを得るための戦いや争いになったとしても、それらは男によつて行われていると思われる。子供をかかえた母親や、子供をかかえてはいないが、いずれ子供をかかえることになる女は、戦いの場で育児は行えないから平和のシンボルとなる。多かれ少なかれ、こういうイメージが女にはもたれている。それだから、英国の女の宰相が遠い小さな島へ兵隊を送ると「アレ？」と素朴に不思議がるひともいたのである。

もう四十年近く前になつてしまつた「戦中」のハナシになつても、女の戦争体験はたいいてい男を奪わ

れてしまった「銃後」の生活の苦しみ、夫や息子の命をとられた悲しみであつた。たしかに、女は子供同様、あの戦争には手も足も出なかつたのが事実であろう。しかし、わずかではあるが、女の着るキノの袖をハサミで切る女のひとも、パーマネントの髪を見つけるとそれを容赦なく切る女のひともいたのである。

昨年（一九八二）の秋に、『女性進化しなかつたか』という書物が翻訳されて出た。著者のサラ・ブラッファード・フルディという女性社会生物学の学者である。アメリカでウーマン・リブの運動が起りはじめたところから、霊長類学者の女性研究が熱意をもつてはじめられたが、その成果が、ウーマン・リブ運動の波がひいてからあらわれたのである。フルディの本は、ヒトを含めた霊長類のメスをあらゆる角度から研究、分析したものである。これまでの霊長類社会の解明は、オスの行動からなされてきた。フルディは、最近の霊長類の行動研究の成果から、性の不平等を社会問題としてだけでなく、動物としての女性の本質から考えるべきだとし、そこから、男性優位の原因を男性中心主義的に追求している社会科学、自然科学の方法を非難している。

このフルディの書物が提出したおもしろい問題のひとつは、「女は争わない」という嘘を暴露したことである。過剰なほど多くの霊長類の例によつて、競合性、自己主張、団結、性的主導性が欠如しているというのはメスの本性ではないと主張している。メスの競合や自己主張や団結や性的主導性が男に劣るといふのは男性中心主義的偏見であるとしている。

ところで自己主張や団結や性的主導性はともかく、競合に関しては、女を平和主義者だとする見方に